
列伝記～哀しき蜀将、諸葛譚、諸葛尚

月下の梟

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

列伝記〜哀しき蜀将、諸葛譚、諸葛尚

【Nコード】

N9365J

【作者名】

月下の梟

【あらすじ】

一騎当千の猛将や神算鬼謀の名軍師が華々しく活躍した三国時代。しかしその全てが栄光を手にしたわけではない。むしろ非業の死を遂げた者達のほうが多い。そんな彼らにスポットを当てた一話完結の物語

深緑抱擁蜀（深緑、碧雲に抱かれし蜀）

碧雲抱擁蜀

我生有蜀為（私の命は蜀のために…）

我命運有蜀（私の命運は蜀にある）

成都陥落の報せを聞いたとき覚悟した…これが私にとって最後の戦となるのだと…

成都が陥落し、周りで戦っていた将たちも矢尽き刃折れ、降伏する者たちが出てきていた。しかし、私は例え他の将たちが降伏の道を選んだとしても降伏という選択をとることはできない。私は先帝や父の志を継ぐためにもここで簡単に降伏するわけにはいかないのだ。勝ち目のない戦いだという事は火を見るよりも明らかであった。私はこの戦で十中八九死ぬこととなるだろう。例え、生き抜くことができたとしても先帝、父…そして、わたしが愛した蜀が甦ることはない…唯一つの心残りは、我が息子、尚はまだ19。私と共に死ぬにはまだ若すぎる。

父はここで死ぬつもりだろう。先ほどの軍議での様子でそれは容易に窺えた。そして、この戦から私を遠ざけ、死なせんとしている事も…親が子のことを心配するのは当然の事。しかし、私は父の子であると同時に鬼才諸葛孔明と天才發明家黄月英の孫であり、あの方たちの血を引く者として…いや、この蜀を興した英雄たちの志を継ぐ者の一人として退くことはできない。仮に力が血が繋がりがなかったとしても彼らが愛した蜀をただ蹂躪されるのを黙って見ている事は出来ない。彼らが愛した蜀は私が愛した蜀でもあるのだから…

案の定、私は戦線から外されていた。しかし、私はこの戦から手を引くことはできない。若輩者の私にも蜀の運命はハッキリとしていた。消滅、滅亡、滅没……どの言葉もあてはまる気はしない……それに私にとって蜀を失うという事は自分の居場所を失うという事……それと同時に私自身の存在理由を失うという事……それらのすべてを失った者の行く末は決まってる。

この戦、父や先帝に恥じぬ戦いをしなければならない……それは天より我らを見守ってくれている父や先帝への誓いだった。私は一期、偉大な父上の重圧に耐えきれず、政治から逃げた。現場を離れてからも頭にあるのは蜀の事ばかり……蜀の危機を知り、現場に戻った時、蜀の現状を見て唾然とした。黄皓を始めとする文官達により、蜀の内政は乱れ切っていた。私が父上の重圧に負けずに前線でもつと振る舞う事が出来ていればこれほどまでにひどくはならなかっただろうが、その重圧から逃げた私に彼らを責める資格などない。どれほど凄惨な状況になっていようとも、私はこの蜀の心を守り抜かねばならない……

城に迫る兵たちを打ちつつ奮戦したが多勢に無勢、手の打ちようがなかった。そんな中、背中に激痛が走った。見ればそこには一本の矢……引き抜き、これが最期と目の前に迫る魏の兵たち十数人を斬り伏せるも私に矢の雨が降り注いだ……

諸葛譚の修羅の如き、奮戦ぶりに魏の将兵は畏れ慄いた。捕縛する事も叶わず、魏の将、鐘会は配下に指示を出し、矢を射かけた。矢は雨のように降り注ぎ、諸葛譚は立ったままその場で絶命していたのだった。

“ 一体どれほどの魏の将兵を打ちとったのだろうか……？ 父上はまだ

戦っているのだろうか……？”

父の言いつけを破り、私は綿竹で魏の将兵と交戦していた。

私が振るう槍には多くの英雄の魂が込められている。学問よりも武術を好んでいた私は幼き頃は馬岱將軍に、十を過ぎたころからは姜維將軍に兵法も教わった。そして、馬超將軍の槍を受け継いで使用している。開戦から一時程で数十人を討ち取っただろうか……私の周りにいた魏の将兵たちは息をしておらず、私が斬り進んだその背後にその骸をさらしていた。しかし、魏の精鋭たちを相手に私は傷つき、絶えずに流れ出る地は私の意識を奪おうとしていた……限界に近かった私をここまで支えていたのは、私の槍に宿る多くの英雄たちの思いが私を支えてくれていたのかもしれない……そう思うとふと笑みがこぼれた。その時、眼前に5人の将達がこちらに向かってくる事に気がついた。

“ここが私の死に場所となるのか……”

そう思い、傷を増やしながらも四人の武將を突き殺した。最後の武將が何かを言っていたが、関係なかった。

猛然と打ちかかってくる武將に私は呼びかけた。

「もう戦は終わった！ 槍を納め、投降してくれ！」

そして、本能的にこの者を死なせてはいけないと感じた。

劉？殿の死を目の当たりとし、私はこの者に生きてほしかった。

「頼む！ 降伏してくれ！ 君のような忠義の士を死なせたくはないのだ！」

「問答無用！ この乱世、相容れぬ者同士は戦うしか無い！」

その武將が繰り出す槍をかわしつつ、纏れ合いながら馬から転がり落ちる。そこへ二十人ほどの友軍の兵達が駆け寄ってきた。

「？ 艾様！ 助太刀いたします！」

その声を聞き、とっさに叫んだ。

「来るな！お前達は退け！」

私の叫びには味方も対峙した武将も驚いていた。

「…？艾か…私の最期を飾るには最高の相手だ。さあ、いざ尋常に勝負！」

言うと同時に打ちかかってきた。鏑迫り合いをしながら尋ねた。

「そなた、名は？」

「諸葛尚…鬼才、諸葛孔明の直系の孫だ！」

そう叫び、二又の槍を討ちつけてきた。

弾き返したかと思えば続け様に槍の柄が私の脇腹を捉える。その反動で吹き飛ばされた私に諸葛尚の追撃が続いた。地面に叩きつけられた私には避ける事も叶わずとっさに腰の剣で薙ぎ払った。

私の剣は諸葛尚を捉え、その口からは大量の血が溢れだす諸葛尚は途切れそうな声で

「くっ…止めを…刺せ…」

その場に膝をつき、槍で体を支えながら

「降っては…ただけませんか？」

「くどいぞ…！これ以上…私に…生き恥を…晒させるか！」

諸葛尚が声を放ったびにあたりに鮮血が飛び散る。

「…口惜しいですが、仕方ありません…最期に言い残す事は…」

諸葛尚は私から目を逸らさずに告げた。

私は幸運だったのかもしれぬ。最期の最期で戦えた武将が？艾の様な武将であったのは…

「…私は…あなたのその剣にかかり、ここで果てる事となるでしょう…」

自身の血で足元は徐々に血で染まっていた。

「ここで…私の肉体は尽きる事となるでしょうが…ゴホッ！」

咳き込み、飛び散った血は目の前にいる？艾に降りかかった。？艾は死にゆく私の言葉を聞き洩らさないように真摯に向かい合っていた。

「ハア：ハア：この心までは：蜀の心までは奪わせない：！」

「その気持ち、確かに聞き届けました。私はあなたのような御仁と戦えて幸せです：」

私は？艾が紡ぐ言葉に耳を傾けた。

「あなたが蜀のために生きたように私は魏のために生きます：」

私は思わず涙し、気付いた。この武将は私だと：国に疎まれ、蔑まれても信じた志を貫こうとする己が姿を見た。

「これを：」

突如、差し出されたもの：それは先ほどまで諸葛尚殿が振るっていた二又の槍であった。

「ハア：これを：受け取ってほしい：ゴホッ：」

鮮血が飛び散る中、諸葛尚が差し出した槍を手にした。

「この槍は：私が先人達から：受け取った志の証：」

「：」

「そなたの様な武将と最期に戦えた事を嬉しく思う：ありがとう：」
腰刀を抜くと諸葛尚はそれを自らの喉にあてたのだった：

彼を最期に蜀は滅んだ：彼は時の流れに逆らい、己が信念を貫き通し生涯を全うした。彼は私以上の：溢れんばかりの才知をもった素晴らしい武将だった。彼ほどの御仁がいても蜀は滅んだ。私はただ時の流れに乗れたから勝てただけ：奇跡にすぎない。

どれほど猛々しい武将や才知溢れる天才軍師であっても有限の時を生き、そして散っていく：いずれ私も彼らと同様に散りゆくのだろう：永遠などは存在しない：それはわかっている。しかしそこにある志などの精一杯生きていたそれは証として人の心に刻まれている。刻まれたその思いだけは永遠であると信じたい：

私も彼らのように精一杯生きなければならぬ。精一杯に生きる事こそが散って行った者たちに報いる事なのだと思う

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9365j/>

列伝記～哀しき蜀将、諸葛譚、諸葛尚

2010年11月13日21時59分発行